

**25**  
**2015. 5**

# 薬友会報

千葉大学薬友会



マヒドン大学薬学部ダブルディグリー  
協定調印式



チュラロンコーン大学薬学部長一行来学

|             |    |
|-------------|----|
| 薬友会長・研究院長挨拶 | 2  |
| 退任のご挨拶      | 3  |
| 新任教授ご挨拶     | 4  |
| 会員便り        | 6  |
| 卒業生（留学生）から  | 8  |
| 薬学部この一年     | 9  |
| 研究室便り       | 11 |
| クラス通信       | 16 |
| 支部便り        | 20 |
| サークル紹介      | 20 |

|                  |    |
|------------------|----|
| 学部だより            | 21 |
| 教員の異動            | 21 |
| 薬学部入学者の状況        | 21 |
| 大学院医学薬学府入学者の状況   | 21 |
| 薬剤師国家試験合格状況      | 21 |
| 卒業生・修了生の進路       | 21 |
| 今年度の受賞記録         | 22 |
| 叙勲のお祝い           | 22 |
| 薬友会より            | 22 |
| 孔雀の絵および変形菌標本について | 23 |
| 薬友会生涯教育セミナー      | 24 |
| 編集後記             | 24 |

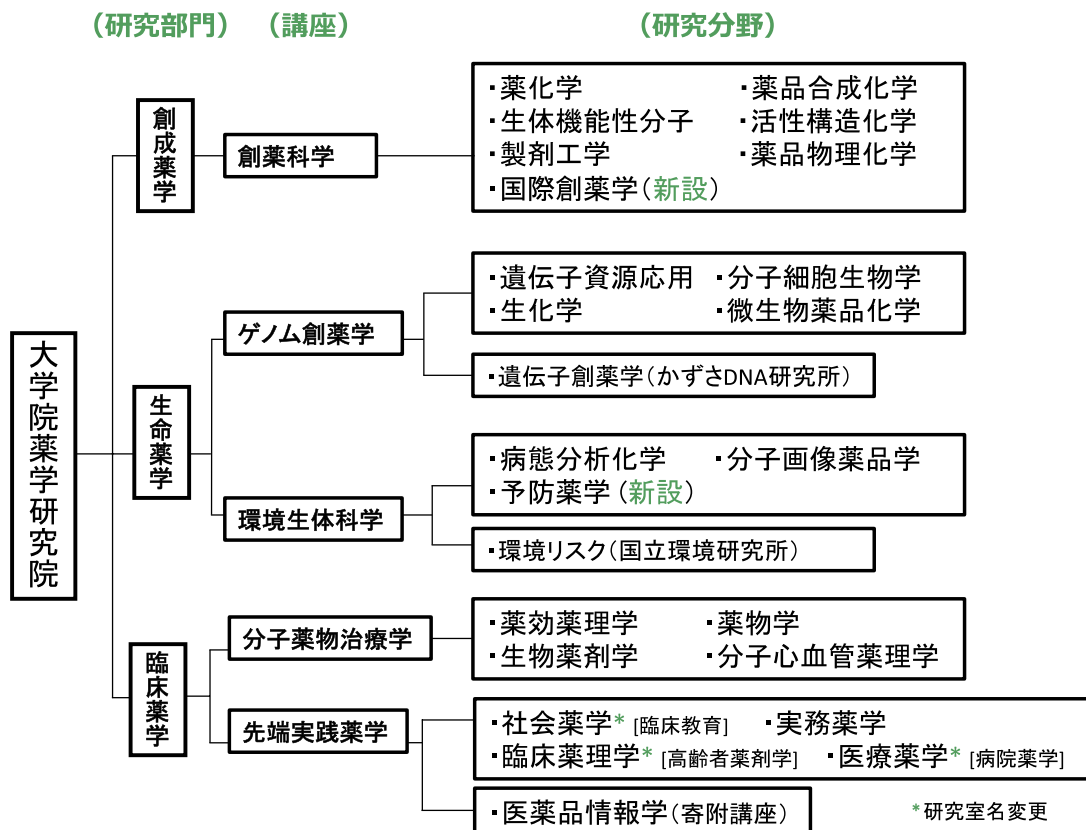


薬友会会員の皆様に、薬友会報25号を通して千葉大学大学院薬学研究院・薬学部の今日日をお伝えできますことを大変嬉しく思います。昨年夏の薬友会総会の折にもご説明申し上げましたが、ここ亥鼻キャンパスでは、国立大学改革強化推進補助金による「次世代対応型医療人育成と治療学拠点創成のための亥鼻キャンパス高機能化構想」事業を強力に進めています。この中核となるのが新たに設置された「未来医療教育研究機構」であり、これと薬学部、医学部、看護学部、附属病院、各センター等が連携することで、高度医療人の総合的育成、イノベーション（創新）のための機能強化、グローバル化などに力を注いでいます。これに関連した薬学研究院の取組みの一端をご紹介します。

ミッションの再定義と社会的ニーズを踏まえ、研究部門・講座組織をこれまでの『3研究部門（環境生命科学、薬物作用、分子創薬科学）、8講座（環境科学、ゲノム機能学、神経薬物学、高齢者薬物学、臨床薬学、遺伝子薬物学、分子医薬科学、創薬資源科学）、2連携協力講座』から『3研究部門（創成薬学、生命薬学、臨床薬学）、5講座（創薬科学、ゲノム創薬学、環境生体科学、分子薬物治療学、先端実践薬学）』に、この4月に再編しました（下の組織図をご参照ください）。この改組の目玉の一つは、創成薬学研究部門創薬科学講座の中に国際創薬学研究分野を新たに設けた点です。国立大学改革強化推進補助金を活用させていただき、この分野に外国人特任教授と外国人特任助教を採用しました。また、生命薬学研究部門に予防薬学研究分野を設置しました。さらに、グローバル化を推進するために、上記外国人教員の採用に加え、博士号ダブルディグリー制度（タイ国シルパコーン大学およびマヒドン大学との協定）、ソウル国立大学薬学部との定期的なジョイントセミナー、国際共同研究の一層の推進、大学院生の海外派遣などを実施しています。この改組を中心とした取組みにより、私たちは、1）国際的視野に立った創薬研究者の育成、2）国際的なリーダーシップを発揮しうる医薬品行政担当者や医薬品開発研究者の育成、3）治療学及び公衆衛生領域の幅広い発展に資する人材の育成、4）臨床現場において他職種と連携し、対処個別化に関する問題解決などの知識・技能を有する課題解決型高度薬剤師の育成、を目指しています。

学部教育におきましては、薬学教育新モデル・コアカリキュラムに対応するために、カリキュラムや授業内容を改定し、より充実した講義、演習、実習を行ってまいります。この中で、英語教育にも力を入れたいと考えています。一方、今年度は薬学教育評価機構による第三者評価が予定されていますので、十分な準備をしてこれに臨む所存であります。さて、今年2月と3月に行われた千葉大学薬学部の入学試験は、前期日程が7.6倍、後期日程は28.8倍でした。永年培われた千葉大学薬学部の伝統のお陰をもちまして高い競争倍率を維持していますが、少子化に伴い18歳人口は2030年には100万人程度（現在の約82%）にまで減少すると言われています。これからも優秀な学生さんを確保し有能な人材として社会に送り出すために、学部・大学院教育にも全力を尽くしていきたいと考えております。引き続き薬友会会員の皆様のご支援とご協力を宜しくお願い申し上げます。

## 平成27年度からの千葉大学大学院薬学研究院の教育研究組織図



## 退任のご挨拶

濱田 康正



私は本年3月31日をもって千葉大学薬学部を定年退職しました。思えば、1995年9月に名古屋市立大学薬学部助教授から天秤一つない本学薬化学研究室に赴任してから19年7ヶ月間でした。長いようでもあります。過ぎてみればあつという間の年月でした。はじめにした仕事は何もない実験室を使えるようにすることでした。すべての研究室の実験器具や冷暖房設備をそろえ、はてはドラフトチャンバーまで購入しなければいけません。当時はバブル崩壊後の低成長の時代で研究費も集まらず、当初は研究どころの話ではなかった。それも今は懐かしい思い出です。

研究テーマは前任地で反応試剤を当量以上用いる反応を主として研究していたので、先を見据えて効率のよい触媒的合成法の開発と応用にしました。幾つかの遷移金属触媒不斉反応や有機触媒不斉反応の開発に成功し、その応用として海洋から得られる生物活性天然有機化合物の合成を行った。こうした背景のもと精進のかいがある「有機合成における新規方法の開発とその有用天然有機化合物合成への応用」というタイトルで平成23年度日本薬学会賞を受賞した。これは優秀な研究室員のおかげと彼らの協力に感謝しています。

私の時代はインターネットが長足の進歩遂げた時代でした。赴任当時は購読している科学雑誌の値段を比較して、どの雑誌を削るか喧々諤々の議論があったものです。数年後にはこれらの雑誌が電子ジャーナル化し、図書館に行く必要がなくなったのは大きな変革でした。更に合成経路を考える上で重要なデータベースSciFinderが導入され、自分の机にいながらにして必要な情報を簡単に得ることができる時代になりました。研究環境は大幅に改善され、建物も一新され、この上ない環境になっています。私のような古い世代にはたいへん便利ですが、学生さんたちにはあまりに簡単に情報が入手でき、特に専門知識がなくとも実験出来るため、本人の実力の向上につながるのかと最近では危惧しています。豊かなことは科学や研究にとって無条件にいいことではないような気がします。

思い出に残る出来事としては日本薬学会第122年会の開催担当校、千葉大学薬学部創立120周年記念事業、西千葉キャンパスから亥鼻地区への移転が上げられます。どれも一大イベントといえる出来事に3つも遭遇できたことはたいへん幸運でした。

最後にこの場をお借りして、お世話になった多くの方々にお礼申しあげるとともに、ご健康と今後のご活躍をお祈りいたします。有り難うございました。



## 退任のご挨拶

山本 友子



20世紀最後の年に、微生物薬品化学研究室の教授に着任してから早くも15年の歳月が流れました。学部の卒業研究時をスタート地点としますと44年が過ぎたことになります。この間、様々な環境で研究をし、紆余曲折を経て今日に至りましたが、私自身の研究の歴史を振り返りますと「偶然と自然と必然」という言葉が思い浮かびます。「世の中のこととはかく偶然に起こる。いかなる偶然にも自然に対応し、後でその体験を自分の歴史の必然の中に取り込む。」という生き方をしてきたように思います。卒業研究と修士課程では「薬剤耐性遺伝子の研究」に、北海道大学の博士課程では「麻疹ウイルスの研究」に携わりました。博士課程の途中で千葉へ戻ることとなりましたが、幸いにも恩師山岸三郎先生に助手に採用していただき、「薬剤耐性トランスポゾン」の研究を立ち上げ、

チームの学生さんとともに実にエキサイティングな時代を過ごすことができました。1983年にUtah大学のGeorgopoulos教授の下で、現在の私の研究の原点となるストレス蛋白質の研究を始めました。帰国後しばらくたった1986年、この時は偶然ではなく自ら決断して助手を退職し、幼い息子を伴ってUtah大学へ戻り、再びストレス蛋白質の研究に関わりました。帰国後、杏林大学医学部講師・助教授となり、ストレス応答の概念を導入した細菌病原性の研究を世界に先駆けて立ち上げました。2000年に着任した現在の研究室では、前任地で開拓した研究を発展させた「細菌感染分子機構の研究」と「ストレス蛋白質の作動原理の研究」に加え、研究室の伝統である「薬剤耐性の研究」を復活させて研究の3本柱とし、多くの研究成果と優れた人材を世に送り出したことは無上の喜びです。研究・教育以外でも様々な仕事をさせていただきました。特に齋藤康前学長時代に学長特別補佐として、真菌医学研究センターの課題に取り組んだことは貴重な経験でした。その機会に「千葉大学感染症研究ネットワーク」を作りましたが、研究会は回を重ね、現在は国際フォーラムに成長しています。このネットワークが「千葉大学亥鼻ブランド」の一つとして羽ばたいてくれるよう願っております。

4月からは、真菌医学研究センターに特任教授としてお世話になります。センターの前身は、山岸三郎先生が研究を始められた腐敗研究所ですので、私どもの研究室のルーツへ戻していただけるようで感慨深く思います。44年間多くの人々に支えられ、実に充実した年月を過ごすことができたと思います。皆様に改めて感謝申し上げます。千葉大学薬学部の栄えある発展を心より祈念いたします。







2015年4月より、千葉大学大学院医学薬学府長を務めることになりました。医学薬学府は、2001年に全国初の医学・薬学融合型大学院教育組織として設置されました。2011年には薬学部の移転が完了し、亥鼻キャンパスは、医学部、薬学部、看護学部、真菌医学研究センター、医学部附属病院など、医療系の教育・研究施設が集積した医学薬学の大学院教育として、時代の最先端をゆく理想的な場所となりました。現在、医学薬学府は修士課程（医科学専攻と総合薬品科学専攻：収容定員154名）、4年博士課程（先端医学薬学専攻＜先端生命科学コース、免疫統御治療学コース、先端臨床医学薬学コース、がん先端治療学コース＞：収容定員432名）、後期3年博士課程（先端創薬科学専攻：収容定員45名）を擁し、国立環境研究所・かずさDNA研究所・医薬品医療機器総合機構（PMDA）・放射線医学総合研究所・千葉県がんセンター・理化学研究所統合生命医科学研究センターの連携講座から優れた教授陣を迎え、医学研究院と薬学研究院との緊密な連携の下、全人的視野に立った医療従事者、医学・薬学両方の知識を持った専門家や先端的生命健康科学に精通する研究者等、医学薬学の未来を担う人材の育成に当たっています。文部科学省支援プロジェクトである博士課程教育リーディングプログラム、治療学CHIBAイノベーション人材養成プログラム、がんプロフェッショナル養成基盤推進プランが実施され、また、大学院秋入学制度の充実化や海外協定校とのダブルディグリー制度化（後期3年博士課程）により、グローバル人材育成も進めています。

国立大学機能強化のために、文部科学省が主導する国立大学改革プラン（大学の強み・特色の重点化、グローバル化、イノベーション創出、人材養成機能の強化）の迅速な実行が求められており、千葉大学は「世界最高の教育研究の展開拠点」、「全国的な教育研究拠点」あるいは「地域活性化の中核的拠点」のいずれに該当するのか、そして、改革成果は大学運営交付金の配分額に直結します。そこで、亥鼻キャンパスでは、「ミッションの再定義」を踏まえ、千葉大学亥鼻キャンパス高機能化構想を実現すべく、次世代対応型医療人の育成と「治療学」拠点創成として千葉大学未来医療教育研究機構を設立しました。学長のリーダーシップの下、医学・薬学・看護・附属病院が横断的に連携して、リーディング大学院人材育成拠点となる未来医療教育研究センターの中で、再生治療学センター・専門職連携教育実践（IPE/IPW）センター・高度医療開発人材育成センター・超高齢社会研究センター・予防医学センター・真菌医学研究センター・法医学教育センター・こどものこころ発達研究センター・社会精神保健教育研究センターを密接に連携させて、国内外の第一級の教員・学生を結集し、産学官の参画を得ながら、治療薬や治療法の開発とともに、グローバルに活躍する「治療学」の研究者や医療従事者の育成を一層加速してゆかねばなりません。薬友会員の皆様のご支援とご鞭撻をよろしくお願い申し上げます。

## 新任教授ご挨拶

Mahmood Ashfaq

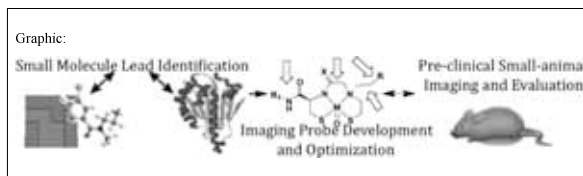


Professor Ashfaq Mahmood arrived from Harvard Medical School, Boston, USA to join our faculty in the Faculty of Pharmaceutical Sciences, Chiba University at the Inohana campus in December 2014. He is an avid educator and scientist and his primary research interests are at the interface of chemistry, biology and medicine. Specifically, the research is directed toward the design, synthesis, development and evaluation of new molecular imaging probes for in-vivo imaging.

Professor Mahmood is a graduate of Brown University, USA where he was awarded a Ph.D. in Chemistry in 1988. After completing a post-graduate fellowship from The Johns Hopkins Medical Institutions in 1989, he was recruited as a faculty member at Harvard Medical School in the Department of radiology. At Harvard Medical School he served as a faculty member in various academic, administrative and technical roles for more than 25 years where he trained numerous undergraduate, graduate and post-graduate students as well as physician-scientists in the field of radiopharmaceutical chemistry and molecular imaging. His training is as a synthetic chemist with over 25 years of hands on experience and skills in all aspects of the chemical synthesis (medicinal, organic, inorganic, bio-conjugation) and imaging probes design. His research experience and skills are in synthetic medicinal chemistry and entail the conceptual and molecular-design of novel imaging probes, for which he hold 6 patents issued to Harvard University. Additionally, he is also well versed in and has extensive hands on experience and expertise in developing and conducting in vitro and in vivo biological experiments in preclinical model systems particularly in assessment of targeted imaging agents and their mechanism of localization/action and modulation in various cell/tissue culture as well as small animal models.

### Representative publications:

1. Cheng Z, Mahmood A, Li H, Davison A, Jones AG. [<sup>99m</sup>TcOAADT]-(CH<sub>2</sub>)<sub>2</sub>-NEt<sub>2</sub>: a potential small-molecule single-photon emission computed tomography probe for imaging metastatic melanoma. *Cancer Res* 2005; 65: 4979.
2. Zaheer A, Lenkinski RE, Mahmood A, Jones AG, Cantley LC, Frangioni JV. *In vivo* near-infrared fluorescence imaging of osteoblastic activity. *Nat Biotechnol* 2001; 19: 1148.



## 新任教授ご挨拶

小椋 康光



### 略 歴

平成8年 千葉大院・薬博・修了、千葉大学薬学部助手・大学院薬学研究院准教授、昭和薬科大学教授を経て現職

平成27年3月1日付けで千葉大学大学院薬学研究院に新設された予防薬学研究室を主宰することになりました。予防薬学研究室では、教育においては衛生薬学を担当し、研究においては環境毒性学分野での展開を図っていきたくと考えております。

平成27年度に改訂となった薬学モデルコアカリキュラムにおいて、衛生薬学は独立した項目となり、その範囲も疫学、栄養学、食品衛生学、毒性学及び環境科学と多岐にわたっております。いずれも国民生活と密接に関わりをもつ分野であることから、コアカリキュラムの範囲に留まることなく、最新の知見や最先端の研究成果を講義に取り入れ、学生諸君の問題探究・解決能力を醸成できるような教育を行っていきたくと思っております。研究においては、環境汚染物質としての金属化合物や栄養素としての微量元素の毒性や生理作用の解明に、本学大学院生であった頃より取り組んでまいりました。最近の研究手法としては、栄養素である必須金属元素やレアメタルとよばれる工業的に有用な元素に関して、環境中での動態といったマクロな視点と、生理作用や毒性を分子レベル・化学反応レベルで解析するといったミクロな視点の両面からアプローチをしております。多くの失敗はありましたが、幸いにも金属含有代謝物の解析においては、国内外

からそれなりに認知されているものと自負いたしております。最近の研究テーマの一つにレアメタルを取り上げています。レアメタルは、他の元素が持ちえない物理化学的性質を有しているがゆえに重用され、人類の文明の進歩に寄与しています。一方、他の元素が持ちえない物理化学的性質に基づく毒性が懸念されるわけですが、今のところ十分な評価はされていません。レアメタルの有用性と有害性がトレードオフの関係にならないよう、リスク評価を出口とした基礎研究を展開しています。

清澄な環境と健全な生態系を維持し、その結果として人類が健やかな天寿を全うできることに、予防薬学研究室の研究成果が貢献できるように努めていきたくと考えております。薬友会会員の皆様方のご支援並びにご鞭撻をどうぞよろしくお願い申し上げます。



### 主要論文

1. 小椋康光\*：環境毒性学におけるメタロミクス研究の展開. *YAKUGAKU ZASSHI* (2015) 135, 307-314
2. 小椋康光\*：スペシエーションによるセレン及びテルルのメタボローム解析. *生化学* (2013) 85, 519-530

## 新任教授ご挨拶

根本 哲宏



### 略 歴

平成13年 東大院薬・薬修・修了、千葉大学大学院薬学研究院助手・助教・講師・准教授を経て現職

平成27年4月付けで、濱田康正教授の後任として千葉大学大学院薬学研究院、薬化学研究室教授を拝命致しました。伝統ある研究室の教授を担当する大任に身の引き締まる思いが致します。薬友会報の紙面をお借りして皆様にご挨拶申し上げます。

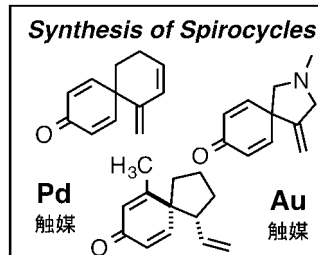
私は東京大学大学院薬学系研究科博士課程2年在学中に前任の濱田康正教授にお声掛け頂き、平成15年1月に千葉大学大学院薬学研究院、薬化学研究室助手として採用されました。以降12年3ヶ月間にわたり本学部にて有機合成化学についての教育、研究に携わって参りました。この間、東京大学大学院薬学系研究科の柴崎正勝教授の御指導の下で学位を取得しているほか、英国オックスフォード大学化学科に留学する機会も頂きました。学部3年生の研究室配属にて何となく選んだ有機合成化学でありましたが、分子触媒が作り出す精巧な機能に衝撃を感じて以来、気づけばそれが生業となっております。半ば趣味の感覚で有機合成化学と接して来られたのは、恵まれた環境で研究をさせて頂いた賜物と感謝しております。

これまでの研究テーマとしては、分子の世界における右手と左手：キラリティーを作り分ける技術である不斉合成法の開発と、生物活性を示す天然物や複雑な構造を持つ分子を効率よく合成する為の新しい有機合成法開発に取り組んで参りました。いずれも触媒反応開発を基盤に研究を進めることで“効率の良いものづくり”を追求しています。今後も触媒化学を基盤とした有機合成化学研究を全力で押し進めることで、千葉大学薬学部の発展に貢献して行く所存です。また、医療系の学部・施設が一カ所に軒を連ねる亥鼻の地の利を最大限に活用することで、独自の合成技術を創薬・医療に役立てる道も探っていきたいと考えております。

現代社会は有機化合物であふれています。それらの多くが合成化学的に生産されたものと言って間違いありません。医薬品をはじめとする“付加価値の高い有機化合物”の効率供給をもって社会に貢献できる人材の育成に取り組むと共に、有機化合物に関しての高度な知識を備えた薬剤師の輩出にも貢献していきたいと考えております。薬友会会員の皆様方のご支援をお願い申し上げます。

### 主要論文

- T. Nemoto, Y. Ishige, M. Yoshida, Y. Kohno, M. Kanematsu, Y. Hamada. Novel Method for Synthesizing Spirocyclohexadienones through a Pd-Catalyzed Intramolecular *ipso*-Friedel-Crafts Allylic Alkylation of Phenols. *Org. Lett.* 12, 5020-5023 (2010).
- T. Nemoto, Z. Zhao, T. Yokosaka, Y. Suzuki, R. Wu, Y. Hamada. Palladium-Catalyzed Intramolecular *ipso*-Friedel-Crafts Alkylation of Phenols and Indoles: Rearomatization-Assisted Oxidative Addition. *Angew. Chem. Int. Ed.* 52, 2217-2220 (2013).





## 薬友会副会長



渡辺 和夫

略歴  
昭和33年千葉大薬卒業、昭和38年東大院薬博修了、東邦大薬学部講師、名古屋市立大薬学部講師・助教、富山大薬学部教授、富山医科薬科大和漢薬研究所教授・研究所長、千葉大薬教授を経て、平成12年定年により退職、同年千葉大名誉教授。



山口 直人

略歴  
昭和53年千葉大薬卒業、昭和58年東大院薬博修了、摂南大薬学部助手、熊本大医学部助手・助教授、静岡県立大薬学部助教授を経て、平成12年より千葉大薬教授。



内田 武

略歴  
昭和56年千葉大薬卒業、昭和61年千葉大院薬博修了、アステラス製薬(旧山之内製薬)を経て、平成26年より千葉大学学術研究推進機構産業連携研究推進セッション特任教授、知財活用アドバイザー、平成27年よりデンタルサポート株式会社取締役社長。

平成26年6月の薬友会総会で副会長の交代が承認されました。渡辺和夫千葉大学名誉教授が留任、新たに山口直人教授、内田武特任教授が着任され、先任の立崎隆常磐植物化学研究所代表取締役会長は顧問として、薬友会の発展にご尽力いただくことになりました。

## 会 員 便 り

### 半田（笈川）節子（薬品物理学研究室 旧職員）



薬学部には、学生として学部・大学院修士課程、職員として薬品物理化学教室（教務員、助手、助教授）に計30年お世話になりました。文部省長期派遣研究員として留学中のアメリカで、不思議なめぐり合せでアメリカに住み着く縁を得て、現在はアメリカ市民権を取り、カリフォルニア州で不動産エージェントおよび加州公証人という、日本とはかなり違う仕組みの独立系の職業で働いています。米西海岸には、日本人・日系人が多く住んでおり、日本との書類のやりとり、家の売買を必要とする方が、沢山います。儲かりませんが、仕事を通じて、さまざまな出身国の人と一緒に働き、セールをまとめてセラー・バイヤー共に笑顔で、新しい生活が始まっていくのを見る時が一番うれしい瞬間です。アメリカは年齢差別も禁止で、いつ退職という規制もないので、体が丈夫で頭がぼけない間はつづけたいと思っています。英語を使うことについて一言いうとすれば、話すことはもちろん大事ですが、仕事では書くことがとても重要です。自分の考えを整理し、どう表現したら相手を納得させられるかを学べ、自己発信の起点にもなります。

（昭和45年卒業）

### 黒川 達夫（慶應義塾大学薬学部 医薬品開発規制科学講座 教授）



若葉の頃桜前線とともに新入生を迎える季節となった。華やかな季節も年月を重ね、いつの間にか若葉の息吹を少し遠くから見る立場になった。立派なもの言いや真摯な若者を見るにつけ、比較にならぬほど幼かった当時の自分を噛みしめる瞬間でもある。薬学部のあった西千葉キャンパスでは、源氏物語や近代経済学、フランス語などが面白く、積極的に楽しんだ。学部ではその難解ぶりが気に入って分子軌道法を選んだ。大凡すぐには役立たないことばかり。卒後40年余、社会では追い風は珍しく、雨風ばかり。そのときの精神的な支えは、役に立ちそうもないリベラルアートから学んだ「多様性」や「不確実性」の価値、それと人間の尊厳についての確信であった。言うまでもなく、深い専門への傾倒によっても信条は得られると思う。しかし同じ色の絵の具だけの絵は少し寂しい。若い人には、目の前の課題ばかりでなく、若葉の頃にさまざまな出会いを楽しむよう勧めている。同じく千葉大薬学部に進んだ家族から、薬学は専門習得だけではほ精一杯、リベラルアートの充実はもはや困難なことを知った。しかしようやく新コアカリキュラムに移行することになり、各大学で特色を盛り込むスペースを設けることができる。さて、わが千葉大学は如何。

（昭和48年卒業）

### 渡辺（名波）素子（千葉県健康福祉部 次長）



大学を卒業して、千葉県職員となり37年が過ぎようとしています。県職員としての薬剤師は、薬事行政はもちろんのこと、医療行政、食品衛生、環境衛生、感染症対策、調査研究など様々な分野で活躍しています。

さて、皆さんは、10年後の2025年には、県民の3割が高齢者（65歳以上）となる本格的な超高齢社会となることを御存じでしょうか。そのような時に備えて、在宅医療、訪問介護・看護、介護サービスや、見守りなど様々な生活支援サービスの提供により地域の人たちの生活を支えて行く「地域包括ケアシステム」の構築が市町村を中心として進められています。すでに、薬局薬剤師による訪問薬剤管理指導などが行われていますが、これからは薬局以外で働く薬剤師も、一人の医療者として何ができるのかを考え、そして少しでも関わっていくことが期待されているところです。そして高齢者と呼ばれる方または呼ばれつつある私たちは、今後の人生をどのように生きていくのか、しっかり考えましょうね。

（昭和53年卒業）

## 佐藤（大橋）祥子（カナダ・ケベック・ラバール大学医学部 教授）



### 気がつけば、海外で研究生生活26年

北川晴雄先生主催の薬物研究室での楽しかった卒業研究と鎌倉の日本ロシュ研究所のアカデミア精神旺盛かつ刺激的な研究環境に触発され、大学院に入り直し、基礎研究を選択してから既に28年の月日が経ちました。近年は基礎研究をめぐる環境も刻々と変化しておりますが、このような状況においても研究活動に生き甲斐を見つけられるのは、薬学研究の洗礼を最初に受けた事が懐刀のように心に根付いているおかげだと思っております。ロンドン、アメリカ西海岸ベイエリアを経て、そのまま西に向かって日本に到着せずに、極北のケベックに不時着し、研究室を開催して16年目に突入しました。糖生物学研究から生まれる発見の医療への応用と、シングルセル追跡装置の完成を目指しております。カナダの雪に埋もれることなく、スティーブ・ジョブズの言葉『The only point you fail is when you give up.』を胸にこれからも千葉大薬学卒業生の誇りを忘れずに雪道を歩みたく思います。

（昭和58年卒業）

## 稲山 浩（国立医薬品食品衛生研究所 食品添加物部長）



私は博士課程を修了後、平成5年に国立衛生試験所（現国立医薬品食品衛生研究所）の食品部に入所し、平成19年に代謝生化学部、平成23年より食品添加物部と、常に食品衛生行政に直接対応する研究業務に従事してきました。本研究所は、科学技術と人間の調和を保つための役割を担う“レギュラトリーサイエンス”を実施することを使命としています。現在は、部長として薬局方の添加物版にあたる“食品添加物公定書”の改正作業、内閣府食品安全委員会、厚生労働省等の会議参加、学会活動や研究打ち合わせ等が多く、研究者としては寂しい日が続いております。しかし行政機関、食品企業、地方衛生研究所の方々との交流や、国際会議への参加を通して、人脈も視野も広がり人間的には“心身ともに？”幅がでてきたように思います。千葉大学薬学部研究室出身の先輩や後輩の先生方とも共同研究して、いろいろな面で助けてもらっております。

社会貢献として講演・講義に招待されることも多くなりました。大学院生時代や入所間もない新人の頃は、学会発表の際に発表原稿を準備して、緊張しながら発表しておりましたが、最近は講演直前までパワーポイントスライド作成し、アドリブで話をしております。しかも人前で話すことがなにか“快感”のようになってきました。このような成長は千葉大学の研究生生活の経験があったからこそと感謝しております。今後は微力ながら薬学部・薬学研究院のなにかお役にたてれば幸いです。（平成27年4月1日 食品部部長に異動）

（平成5年博士課程修了）

## 斉藤 克也（株式会社コウズケア 代表取締役）



千葉大学では製剤工学研究室で学びました。昨年は同窓会があり仲井先生、山本先生を始めとする恩師、先輩、後輩と再会し、皆さんのご健在ぶり、ご活躍ぶりに、また同じ時期に大学生活を過ごした森部久二先生が教授となり研究室の新しい体制がスタートしたことに刺激ももらってきました。さて6年間の（鷲のマークの）製薬メーカー勤務後、現在、私は医薬分業の先進地域として知られる長野県上田市で薬局5店を経営しています。創業から200年以上、私が9代目といういわゆる老舗である一方で、昨年にはコンビニとの併設薬局をオープンするなど新しいことも楽しんでいるところです。ただ薬局の事業環境もどんどん変化しており、それなりにストレスを感じることもあります。そんな時にありがたいのはやはり大学時代の友人。毎年のように『肉々会』と称して上野に集まって焼肉を食べたり、栃木へ一泊でゴルフ合宿（もちろん夕食は焼肉）に出掛けたりして心底リフレッシュさせてもらっています。そろそろ焼肉にこだわる年齢ではなくなってきましたが、その時は焼肉ではない旨いものをみつけて一緒に楽しみたいです。

（平成2年卒業）

## 佐々岡 沙羅（宮城県警察科学捜査研究所 研究職員）



現在、宮城県警察科学捜査研究所（いわゆる科捜研）で、勤務しています。専門は化学分野で、様々な鑑定・研究を行っているので、紹介も兼ねて一部を羅列します。

覚せい剤・麻薬・大麻・危険ドラッグ・催眠薬等の医薬品・農薬・毒物・ヒ素等の重金属・アルコール・界面活性剤・車両等の塗膜・灯油等油類・プラスチック・インク・繊維・土砂・コンクリート・ガラス・紙・粘着テープ・爆発物……。検査試料は血液・尿・胃内容物・植物・飲食物・顕微鏡レベルの微細物から運べない物まで多岐にわたり、一生に一度しか行わない鑑定も多数あります。薬学も、分野が広いと学生時代に感じていたので、似ていますね。

昼夜問わずの鑑定要請、裁判の証人出廷、変死事案が日常という少し変わった職場ですが10年以上勤めていると慣れるものだと思っていたら、東日本大震災で自分の考えの甘さに気付かされました。DNA型検査のための数千の遺体資料や遺族資料に接する中で、日常がどんなに幸せだったか気づき、友人・知人の気遣いや親切に感激する日々を過ごしました。今後も様々なことに遭遇すると思いますが、辛かったことは忘れ、楽しかったことは記憶し、強く楽しく人生を歩んでいけたらいいと思います。（平成24年博士課程修了）



## 卒業生(留学生)から

### 黄 永 (カリフォルニア大学 Associate Adjunct Professor)



私は1993年今成登志男先生の主催する薬品分析化学研究室に博士課程学生として加わり、1996年に無事修了し学位を取得しました。その後東京大学薬学部で3年間ポスドクを経験した後田辺製薬大阪研究所に入り、薬物動態研究に従事しました。2001年、機会を得て米国カリフォルニア大学 (UCSF) のDrug Studies Unitに留学し、2006年にAssistant Adjunct Professorの職を得ることができました。その後、Unitのdirectorを勤め、2009年にAssociate Adjunct Professorに昇任し現在に至っています。千葉大学を離れてから18年、あっという間でした。現在は妻(夢敏)、娘(Nicole, 12歳)及び息子(John, 10歳)と楽しく生活しています。今でも千葉大学で過ごした日々をはっきりと思い出すことができ、もし機会にあれば、お世話になった先生方々及び同級生達と是非お会いしたいと思います。

### Chaiedgumjorn Amornrut (シルパコン大学薬学部 Assistant Professor)



I was fortunate to attain Monbusho scholarship in 1996, and was suggested to apply to Chiba University by Ajarn Lawan Sripong, who was my instructor when I was undergraduate student. I enrolled at Department of Bio-analytical chemistry under supervision of Prof. Toshio Imanari and Prof. Toshihiko Toida and I earned my Master degree in 1999 and PhD In 2002. During I studied here, my SENSEI and Japanese friends took care and supported me both in research and life activities in Japan that made me feel at home and enjoyed my life. The life sharing and joining laboratory trip, parties and every activities with Japanese friends were fabulous memory, and these also enhanced my Japanese language ability improvement. I would like to say many thanks for many kind helps to Mr. Tomohiro Maruyama, Ms. Makiko Shima and Mr. Atsushi Suzuki, my Japanese friends I met at first year in Laboratory. For the research courses, the study in this Laboratory gave me an opportunity to work with advanced instruments especially NMR and GC-MS. Furthermore, the knowledge I acquired in the areas of structure elucidation and analysis of polysaccharides with their bioactivities helped me develop my career in the area of pharmaceutical analysis as an instructor at Silpakorn University, Thailand. All these experiences here made me stronger to overcome obstacles I've faced and help me to broaden out my perspectives in research education in my faculty. Finally, I deeply appreciate to Prof. Toshihiko Toida for his advice and kindness during I studied until nowadays.

## 新任教員挨拶

### Amit Rai



Assistant Professor Amit Rai arrived from National University of Singapore (NUS), Singapore to join our Faculty of Pharmaceutical Sciences, Chiba University, at Inohana campus in January 2014. His research interest includes application of integrative omics towards better understanding of properties of biochemical processes of interest, particularly of secondary metabolites, and their regulation. He has been using multi-omics based systems biology approach on several biological systems, such as Arabidopsis, Oryza sativa (Rice), Microcystis aeruginosa, Pseudomonas aeruginosa, Osmium sanctum and Human/mouse cell lines to answer different biological questions.

Dr. Amit received his bachelors of engineering training in Biotechnology from B.I.T Mesra, India (2008), and was awarded gold medal for his excellent academic records. He later joined Department of Biological Sciences, NUS as a Doctoral student under supervision of Associate Professor Sanjay Swarup in the year 2008, and was awarded a Ph.D. in June 2013. Dr. Amit also served as part time teaching assistant during his doctoral studies, and was awarded Best teaching assistant in the year 2010. He was awarded Post-doctoral fellowship by Synthetic Biology Consortium, NUS, and continued his research in the same lab (Metabolite Biology Laboratory, NUS). During his doctoral research, Dr. Amit got extensive training to generate, analyze and integrate multi-omics datasets.





## マヒドン大学薬学部とダブルディグリー協定締結

今年1月末に高山研究院長、山本友子副学府長らがタイバンコクにあるマヒドン大学薬学部を訪問し、ダブルディグリープログラム協定について調印を行いました。今年10月からの本プログラム参加者受け入れに向けて準備が進んでいます。先方からの留学希望者は大変多く、選抜に困るほどの人気だそうです。国際交流は、これから解決しなければならない問題も少なくありませんが、若い世代を育成する意味においても手を抜けません。会員の皆様のご支援をお願いいたします。

## チュラロンコン大学薬学部学部長一行来日

昨年11月10日、タイ王国チュラロンコン大学薬学部学部長 Rungpetch Sakulbumrungsil先生と教員7名が来学されました。タイの大学の薬学部も教育システムが6年制に移行し、本学の6年制教育体制を視察に来られました。チュラロンコン大学薬学部とは約25年の学部間交流実績の歴史があり、現在も毎年教員・大学院学生の交流が続いています。



## ソウル大学薬学部とジョイントシンポジウム

平成26年11月20日から22日までの3日間、ソウル国立大学薬学部から教員7名、大学院学生2名が来学され、21日には第3回ジョイントシンポジウムを共同開催しました。2010年秋に部局間交流協定の締結を機に第1回を本学で有機化学、物理系をテーマに、2012年秋には第2回を、医療系、生物系をテーマにソウル国立大学で開催し、交流を深めています。

## 文部科学省の「スーパーグローバル大学創成支援事業」に採択！

千葉大学は、平成26年9月26日付けで文部科学省の「スーパーグローバル大学等事業『スーパーグローバル大学創成支援』」のタイプB（グローバル化牽引型）に採択されました。『スーパーグローバル大学創成支援』は、我が国の高等教育の国際競争力の向上及び大学改革により徹底した国際化を進める、世界レベルの教育研究を行うトップ大学や国際化を牽引するグローバル大学に対して、制度改革と組み合わせ文部科学省が重点支援を行うもので、千葉大学は、これまでの実績を基に更に先導的試行に挑戦し、我が国の社会のグローバル化を牽引する大学を対象とした「タイプB：グローバル化牽引型」（全24大学）として採択されたものです。薬学研究院も本プログラムの中核的な役割を期待されており、国際化に向けて協力体制を整えて行きます。

## 西田篤司先生が副学長に就任

昨年4月に就任された徳久剛史学長の要請を受け、西田篤司教授が副学長（国際担当）に就任されました。千葉大学がスーパーグローバル大学等事業に採択されたのを機に、益々その活動の場を広げられ、千葉大学の発展に重責を担われています。

右の写真は2014年9月、日露学長会議開催準備のため千葉大学代表団の一員としてモスクワ大学を訪問されたときの記念写真です。





## 成績優秀賞・修士論文優秀発表者が決定

博士後期課程植田圭祐さん、修士課程庄司竜麻さんが成績優秀賞を受賞しました。受賞者は、3月25日の千葉大学修了式において、千葉大学長より表彰されました。また、平成25年度修士論文発表会からの試みとして、優秀な発表を行った学生に対して「医学薬学府長表彰 修士論文（総合薬品科学専攻）優秀発表賞」を実施しております。選考では、研究内容、発表内容、発表態度、質疑応答等が審査されます。平成27年3月2日、3日に行われた

修士論文発表会では、昨年度に負けず劣らず素晴らしい発表がされました。今年度は、前田侑也さん、庄司竜麻さん、松尾宜朗さん、村上洋介さん、堀弘人さん、孫雨晨さんが優秀発表者に選ばれました。庄司さんはなんとダブル受賞です！3月25日の学位授与式の際に行われた表彰式では、表彰状と記念品が授与されました。

## 第10回薬学部ソフトボール大会を開催

平成26年8月27日より記念すべき10回目の薬学部ソフトボール大会が開催されました。今回は参加研究室が19と大幅に増え、多くの教職員と学生が懸命に白球を追いかける白熱したゲームを繰り広げました。不運にも大会期間中は天候に恵まれず、ゲームの延期が続きましたが、9月6日の決勝戦をもって全ての戦いの幕を閉じました。今回の優勝は病態分析化学チーム、準優勝は薬効薬理学チーム、第3位は生体機能性分子チーム及び薬品合成化学と薬品製造学の合同チームでした。今年はどこのチームに栄冠が輝くでしょうか！



## タイチュラボン大学院大学へ留学して

昨年11月の約1ヶ月間、日本学生支援機構のプログラムにて、タイ王国のチュラボン大学院に留学する機会を頂いた。留学中は天然物合成の研究テーマを頂き、現地の学生と一緒に研究生活を送った。

タイで出会った人たちは皆親切で温かく、とても楽しい日々を過ごすことができた。学生、職員とよく話し、コミュニケーションを楽しんでいるような姿が印象的だった。また、大学院には多くの留学生在籍して

おり、留学生も現地の学生も英語がとても上手である。卒業後は欧米に留学したいと話している学生も多く、世界に目を向けている姿に私自身も大きな刺激を受けた。

このような素晴らしい機会を与えて下さった全ての方々への感謝を忘れず、残りの大学院生活も精一杯過ごしたい。  
(薬品合成化学研究室 天児 由佳)

## 五十嵐一衛先生が経済産業大臣賞を受賞

平成26年9月12日（金）に、五十嵐一衛先生（千葉大学名誉教授・昭和39年学年理事）と私、片桐（平成13年学年理事）が、内閣府が主催する「第12回（平成26年度）産学官連携功労者表彰」の経済産業大臣賞を受賞いたしました。また、平成27年2月4日（水）には、ベンチャークラブちば主催の第31回ビジネスプラン発表会「あすのちばを支えるビジネスチャレンジコンテスト」が開催され、こちらでも、大賞を受賞いたしました。五十嵐先生の研究成果を基に起業した「千葉大学発ベンチャー・株式会社アミンファーマ研究所」の取組が高く評価されたことを心から喜んでおります。

薬学部の研究成果から事業化を行った事例が、このように評価されたことを大変うれしく思います。今後も研究開発に益々取り組んで参りたいと思っておりますので、薬友会の皆様のご支援、ご理解の程をどうぞよろしくお願い申し上げます。  
(平成13年学年理事 片桐 大輔)



## 薬友会室が医薬総合研究I期棟7階(701)にできました

念願だった薬友会室ができ、毎週金曜日に職員（<sup>ちゃだ</sup>茶田さん）が在室して資料の整理などを行っています。特に来年は会員名簿発行年でもあり、所在不明者の調査その他より正確な名簿の作成を目指して作業しています。



# 研究室便り

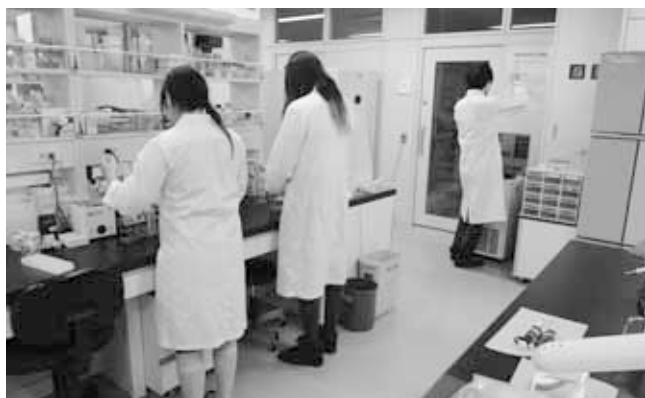
## 薬品物理化学

平成27年2月現在、本研究室には根矢三郎（教授）・星野忠次（准教授）の職員2名と大学院生・学部生21名の総勢23名が在籍しています。研究室では生物無機化学解析や計算科学手法による創薬研究を進めており、昨年度はArtif. Organ, Inorg. Chem., J. Mol. Graphics. Model., Org. Lett.などに論文を発表しました。また、博士課程3年生の箆島智則さんが本年3月、無事に学位を取得しました。鈴木助教は2月から島根大学総合理工学部に講師として栄転されました。根矢教授は昨年8月に特別研究員等審査会専門委員として日本学術振興会から表彰を受けました。



## 遺伝子資源応用

本年度も齊藤和季教授のもと、教職員・学生の計26名で研究活動を進めています。当研究室は、植物が生産する化学成分には薬理活性や健康機能性を有する物質が多く存在することに着目し、植物が生産する多様な天然化合物の生合成に関わる酵素や遺伝子のゲノムレベルでの制御機構の解明とそのバイオテクノロジー応用を目的とした研究に取り組んでいます。写真は研究風景です。最近の研究活動の詳細については、研究室ウェブサイト (<http://www.p.chiba-u.jp/lab/identshi/>) をご覧下さい。薬学基礎研究の発展に貢献すべく日々頑張っておりますので、今後とも温かいご支援をお願い申し上げます。



## 分子細胞生物学

本年度は、教員3名、学振PD、博士9名、修士5名と学部生12名が在籍し、シグナル伝達の研究に取り組んでいます。昨年より、Silpakorn大学からダブルディグリー学生Jintana Tragulpakseerojnさんが加わりました。第134回日本薬学会では、井出雄大君、久保田翔君、武田祐美さん、長谷川仁美さん、山口弘美さんが優秀発表賞、幸龍三郎君が学術ハイライト演題に選ばれ、第87回日本生化学会では本田拓也君が若手優秀発表賞に選ばれました。昨年度の久保田翔君に続き、久保田将一君が学振特別研究員に採用されました。9月には「第14回次世代を担う若手ファーマ・バイオフィォラム」学術集会を亥鼻で行います。頑張っておりますので、卒業生の皆様、お気軽にお立寄りください。



## 環境リスク（国立環境研究所）

環境リスク研究室（平野研）は、国立環境研究所内にあり、現在、博士課程の大学院生が在籍しています。研究テーマは、①「ヒ素化合物の代謝機構と白血病細胞への作用機序の解明」と、②「カーボンナノチューブ、銀粒子、二次生成粒子、PM2.5など粒子状物質の生体影響機構の解明」の2つに大きく分かれます。ナノトキシコロジー分野で共同研究を進めてきているEUのほか、エジプトや韓国からの共同研究者や研究生も一緒に研究を進めています。機器を用いた測定・分析結果と、生化学的手法を用いた遺伝子やタンパクの変化をもとに、培養細胞や実験動物における環境有害物質の生体作用機序を解明することを目指しています。



## かずさDNA研究所（遺伝子創薬学）

遺伝子創薬学研究室は、公益財団法人かずさDNA研究所との連携協力講座で木更津市のアカデミアパーク内にあります。こちらでの研究内容を簡単にご紹介しますと、1) 小原らは、免疫・アレルギー疾患の発症機序や診断法・治療法開発のためのゲノム解析、2) 中山らは、新しい部位特異的組み換えシステムを用いたゲノムエンジニアリング技術の開発と次世代シーケンサーを用いた遺伝子検査法の開発、3) 鈴木らは、網羅的な代謝物解析による有用代謝物に關与する遺伝子と代謝物アノテーションの技術開発、を行っています。それぞれのグループが協力しながら医療や産業応用を目指した研究を行なっております。また、今年度より主実験室が3階西棟に移動しましたので、お立寄の際はお気をつけください。



## 薬効薬理学

当研究室では、スフィンゴ脂質、プロスタノイド、ニーマン・ピック病C型、肺線維症などを研究テーマとしております。平成27年



3月現在、3名の教員（村山俊彦教授、藤野裕道准教授、中村浩之助教）、大学院生11名（博士課程3名、修士課程8名）、学部学生9名が在籍しております。また、藤野准教授が「がん増悪化情報伝達系へのプロスタノイド受容体の役割」に関する研究業績により、平成27年度の日本薬学会学術振興賞を受賞しました。さらに、村山教授、中村助教は薬品合成化学研究室の西田篤司教授と共同で「セラミド誘導体を用いたゴルジ体標識化蛍光プローブ」の開発に成功し、平成25年度千葉大学優秀発明賞を受賞しました。

## 臨床薬理学（高齢者薬剤学）



他研究室で共同研究する学生の出入りも増え、2015年の年明けからは3年生も加わり、約20名のメンバーが

高齢者薬剤学研究室の2014年度は、4月より樋坂章博教授が着任され、新しい体制でスタートしました。博士、修士、学部生と、

賑やかに日々活動しています。研究テーマは薬物動態、薬理学を基盤に、実臨床に近いテーマから基礎的な研究まで幅広く取り組んでいます。8月には研究室旅行で八景島に出かけました。写真はそのときの1枚です。また夏と秋には樋坂教授の共同研究者を交えて創薬モデリングセミナーを研究室で実施しました。11月の卒論発表会を終えて6年生が勇退し、現在各自が新たな気持ちで研究に向き合っているところです。

## 分子心血管薬理学

当研究室では、循環器疾患の病態解明やそれに基づいた新たな治療法の開発を目指した研究を行っています。わが国では高齢化や生活習慣の欧米化により循環器疾患の患者数は増加傾向にあります。これまでたくさんの治療薬が開発され使われてきましたが、治療に反応せず改善がみられない患者さんはまだ多くいらっしゃいます。特に心臓の働きが悪くなる重症の心不全では、生命予後は極めて悪く心臓移植しか治療法がありません。病気の進行を止めるような有効な治療薬を開発して患者さんの役に立ちたいと思います。ゼロからスタートした研究室ですが、メンバーは医学部の大学院生も合わせて10名を超えるまでに成長しました。皆、仲良く頑張っている研究を行っています。



## 生物薬剤学

生物薬剤学研究室では、現在、教員3名（伊藤晃成教授、関根秀一助教、青木重樹助教）、大



学院生10名（博士課程4名、修士課程6名）、学部生（7名）の研究体制で、医薬品による毒性発現の分子メカニズムとこれに基づく毒性予測法開発に向けた研究に取り組んでいます。

昨年の日本薬学会では田中彩華さん（H25年度卒業）、修士課程1年の荒川公一君が、日本毒性学会では、修士課程2年の薄田健史君が優秀研究発表賞を受賞しました。

研究室内では、今春3月末に博士課程への進学、製薬企業の研究職、開発職へとそれぞれの道を歩き始めております。また1月には学部3年生（4名）が、4月には博士課程に3名が進学しており、新たな体制で研究がスタートしています。研究室HPも是非覗いてみて下さい。



## 医療薬学（病院薬学）

本年度の病院薬学研究室は、教員3名（石井伊都子教授、有吉範高准教授、藤吉正哉助教）、大学院生4名、6年生2名、5年生2名、



4年生2名で構成されており、脂質異常症とその合併症を中心に薬物治療の適正化に関する研究など勢力的に取り組んでいます。当研究室では、医学部附属病院薬剤部と毎週月曜日に合同セミナーを行っており、交流も盛んです。平成26年11月より病院薬剤師経験者である藤吉正哉助教が就任し、さらに連携が密になりました。今後も、研究室員だけではなく病院薬剤部の先生方、共同研究先の先生方と切磋琢磨し、研究活動を進めていきたいと存じます。OB/OGの皆様、お近くに来られた際にはぜひお立ち寄りください。

## 社会薬学（臨床教育）



平成27年度4月より研究室は「社会薬学」に名称変更となり構成は、教員3名、事務補佐員1名、大学院生、6年生、5年生、4年生が

5名ずつの24名です。研究は、薬物治療等の臨床の課題を扱うため研究の場は学内にとどまらず、様々な医療機関や研究施設と連携をもち、共同研究先の先生方や社会人大学院生等から多くの刺激を受けつつ日々研鑽に励んでいます。また、地域貢献として平成26年9月に「飲酒・喫煙・薬物の害と私たちの健康」、12月に「無菌製剤処理実務研修会 基礎編・応用編（千葉県薬剤師会共催）」等、様々な活動を行っております。これからも学外の多くの方々との繋がりを大切に臨床の課題に取り組んでいきたいと思ひます。

## 実務薬学

この3月に研究室として3回目の卒業生を社会に送り出し、平成27年度からは教員3名、大学院生2名、6年生2名、5年生1名、4年生1人と、総勢9名の研究室となりました。

研究内容は、「吃逆に用いる柿蒂煎じ液の煎じ方法の違いによる有効性の研究」、「先発点眼薬と後発点眼薬の比較研究」など臨床現場での解決すべき課題に焦点を置いています。また、分子心血管薬理学教室と共同で、在宅医療における薬剤師の役割の確立を目指して心不全患者の在宅薬物治療管理のできるスペシャリス

ト薬剤師の養成に関する研究も行っています。薬剤師の実務と研究の架け橋となるよう日々精進しております。今後とも温かいご支援のほどよろしくお願い申し上げます。



## 生化学

生化学研究室では培養細胞、ゼブラフィッシュ、ショウジョウバエを研究対象として、1)細胞同士のコミュニケーションを担うNotchシグナルがどのように分子レベルで制御されているか、2)Notchシグナルが個体発生においてどのような役割を持っているのか、3)老化に伴ってなぜ記憶は低下するのか、について日夜研究を行っています。

今年度はスタッフ3名、学生17名、職員2名、総勢22名になりました。各自が自分の研究テーマに真摯に取り組み、新しい発見を目指して日々研究に取り組んでいきたいと思ひます。



## 薬物学

平成26年度現在、千葉教授、小林准教授、降幡助教と学生20名が研究室に在籍しています。

昨年10月には、サンフランシスコで日本・北米合同の国際会議があり、研究室からは学生7名が参加・発表しました。また、12月から1月にかけて、タイからの短期留学生が研究室に滞在しました（写真）。いずれも、英語でのコミュニケーションや文化の違いの認識など、学生達にとって世界に視野を広げるよい機会となったと思ひます。

また、平成26年度より千葉教授が日本薬物動態学会の会長を務めています。会長の研究室としてより一層気を引き締め、研究室員一同、精力的に研究室活動に取り組んでいます。



## 薬化学

卒業生の皆さん、最近の薬化学研究室は：

☆2014年4月、研究員が二名、加わりました。

☆2014年8月、ソフトボール大会に参

加するものの、屈辱的二回戦敗退。土を袋に詰めながらリベンジを誓いました。

☆2015年2月、濱田先生の退官に際し、最終講義及び祝賀会が盛大に行われました。

☆2015年2月、薬科学科（四年制）の3年生3名、薬学科（六年制）の3年生1名が加わりました。

最近では教員（全員）も実験に加わり、一丸となって研究に励んでおります。2015年度から新しい薬化学研究室を運営させていただきます。



## 薬品合成化学



西田教授をはじめとするスタッフ3名と大学院生・学部生14名で、有機合成化学のフロンティアに挑んでいます。看板プロ

ジェクトである天然物合成研究では、世界に先駆けていくつかのアルカロイドの全合成を達成しました。新規触媒反応の開発研究に携わる大学院生諸君も学会発表で数々の表彰を受け、3名の大学院生が日本学術振興会特別研究員に採用されています。現在3名の留学生が在籍していますが、さらに西田教授が取り纏めるアジア研究教育拠点事業による海外研究者・大学院生との研究交流や、天児（D2）がタイ王国へ、森川（D2）が米国へ短期留学するなど、国際交流も活発になりました。詳細は研究室のウェブサイトをご覧ください。

## 病態分析化学

平成26年度の病態分析化学はスタッフ・研究員・学生を併せて23名でスタートしました。それでは26年度のトピックを3つご紹介します。1）戸井田敏彦教授が還暦を迎えられ、お祝いのパーティーを5月10日に開催しました。当日は研究室の卒業生も集まり懐かしい時間を過ごしました。2）7月に研究室のホームページをリニューアルしました。以前と比べてシンプルかつ見やすくデザインしました。3）毎年恒例の薬学部ソフトボール大会で4年ぶりに優勝しました【戦

績はvs活性（18－3）、vs薬化（9－8）、vs生体機能（5－4）、vs薬効（10－6）】。研究室員一同、今年度も全てのことに全力投球で取り組んでいきます。



## 製剤工学

山本名誉教授は、昨年7月より科学技術振興機構（JST）のプログラム主管としてご活躍されて



います。森部教授が主宰する研究室は、昨年10月に東助教が講師に昇任、本年4月には植田圭祐博士が助教に採用され、教員の平均年齢35歳と極端に若返りました。学生では、江上君（M2）、小川さん（M1）、重久さん（B6）、竹内君（M2）、が諸学会で計5つの優秀発表賞を受賞しています。一志君（B4）、大八木さん（M1）、黒岩君（M1）はタイの大学に短期留学、タイからは3名の学生を受け入れ、国際交流も活発です。教授室や研究室を改装し、居住環境は大きく様変わりしました。若さを武器にグローバル化の波を乗り越えていきます。

## 微生物薬品化学

2014年度はスタッフ3名と大学院・学部学生12名、補助員2名で細菌感染症や薬剤耐性機構の研究に取り組みしました。複数の共同研究も進み、エキサイティングな日々を送っています。「第97回日本細菌学会関東支部総会」では庄司竜麻君（修士2年）が発表し、「学生優秀発表者賞」を受賞しました。3月には修士論文発表が立派に行われ、博士課程及び企業で研究活動を新たに開始しました。山本友子教授は「特任教授」として、引き続き千葉大学で研究生生活を続けられます。一方で、研究室旅行、杏収穫祭などなど、楽しい企画も満載でした。

4月からは新4年生、博士研究生が加わり、更なる飛躍を目指して研究活動に精進していきたいと思います。





## 薬品製造学

長らく薬品製造学研究室を主宰してこられた石川勉先生のご退職後、当研究室は鈴木紀行准教授の一人体制で平成26年度をスタートしました。その後平成26年7月に堂浦智裕特任助教を迎え、また平成27年3月に小椋康光教授が着任し、予防薬学研究室として新たな研究活動を展開しています。現在、小椋教授は生体微量元素に注目した衛生化学分野で、鈴木准教授・堂浦助教はバイオプローブに関する研究を行っており、今後はそれらの研究分野を融合した新たな展開を目指しています。

(研究室ホームページ：<http://www.p.chiba-u.ac.jp/lab/seizou>) (文責 鈴木紀行)



## 生体機能性分子

26年度は高山廣光教授（薬学研究院長・薬学部長）、北島満里子准教授、小暮紀行助教と博士課程5名、修士課程11名、学部5年生2名、学部4年生5名の計23名の学生が在籍し、アルカロイドをターゲットにした合成研究、成分探索研究、医薬化学研究に取り組みました。これにより北島准教授が日本生薬学会学術貢献賞、メディシナルケミストリーシンポジウム優秀賞を受賞しました。また、昨年3月に熊本で開催された日本薬学会第134年会において、前田博行くんが優秀発表賞を受賞しました。

26年度のD3（石田寛明）の学位論文題目は「新規骨格LycopodiumアルカロイドLycoposerramine-Rの不斉全合成」です。学位論文の題目などにご興味のある方は研究室のHPをご覧ください。



## 分子画像薬品学

本研究室は、4名の教員と博士課程7名、修士課程5名、学部学生8名、秘書1名の総勢25名で構成されています。花岡助教が昨年5月に群馬大学医学部に准教授に就任されました。また、1月には鈴木助教が着任され、新体制となりました。本研究室では、がんの画像診断薬剤やアイソトープ治療薬剤の開発研究を進

めており、多くの成果を上げています。博士課程1年の水野君が日本学術振興会特別研究員に採用され、また修士課程1年の横山さんがなのはなコンペ2015を受賞しました。コンパ、研究室旅行、秋のソフトボール大会を楽しみつつ、日々研究活動に励んでおります。OB/OGの皆さま、研究室が懐かしくなった際には、ぜひお立ち寄り下さい。



## 活性構造化学



活性構造化学研究室の2014年の一番の出来事はやはり當銘一文博士のご栄転です。當銘博士は2005年に当研究室の博士課程を修了し、メナード化粧品の研究員として4年間勤務した後、2009年より当研究室の助教として教育と研究に努力を重ねていましたが、2014年9月に富山大学和漢医薬学総合研究所の生薬資源科学分野へ准教授として昇任・転出しました。當銘博士は学部4年から学位取得までの6年間と助教としての5年間の計11年間、活性構造化学研究室でがんばりました。その結果、平成26年度日本生薬学会奨励賞も受賞しましたので大変おめでたいことが重なりました。今後の富山大学での活躍を期待しています。

## 医薬品情報学(マツモトキヨシホールディングス)

医薬品情報学講座(マツモトキヨシHD寄附講座)は、研究室立ち上げから早2年が経ち平成27年4月で3年目を迎えます。最近では、神戸市で開催の日本薬学会第135年会で、3つの研究プロジェクトから有意義な成果をポスターあるいは口頭で発表する等、研究員、学生一同頑張っております。

例えば、需要者中心のセルフメディケーションに向けた医療者の意識と課題についての調査、OTC薬添付文書の内容を利用者に理解しやすくするピクトグラムの開発に関する研究、及び患者の行動変容を促すコミュニケーション能力向上のための薬剤師教育プログラム開発等の研究プロジェクトから意義ある成果が今まさに収穫できそうな時期にきております。



昭和20年卒業

料亭の豪華な料理を楽しみ、懐かしい教授、講師の諸先生、長谷川長さん、湊さん、森山さん、宮木さん、ドイツ語の老先生、勤労働員、戦時中の船橋、船堀の思い出、臥豚荘（当時は臥竜荘）の話題、気分は70年前の世界に入りました。何度話しても懐かしく若返ることが出来ました。最後に良き時代の歌を披露し母校秋の逍遙歌で終わりました。（佐川 安寿）



昭和23年卒業

就職先は戦後間もないころで求人も限られていました、それでも官庁、学校関係に16名、製薬企業等の民間会社33名、開局者、又開局準備者など10数名と大体就職できた様である。これは先生方のご努力と先輩方の今までの実績が有効に働いたと思われる。其の後2～3人の早い時期の病氣死去者を除きS63年までは全員元気で、計画されたクラス会に多数の方の出席を得ていたが、平成も10年代に入ると物故者も次第に増え、15年に12名、19年21名、24年39名、27年1月現在44名と成った。今回は北海道の井上猛君が26年4月17日に、昨年まで1番元気でクラス会出席常連の青柳高明君が1月14日に逝去。『合唱』今年のクラス会は5月に『新橋亭』新館で開催する予定です。『東京オリンピックまで頑張ろう』を合言葉に是非ご出席をお願い致します。

(三浦 清)

昭和24年卒業

実験の器具も不十分、ガスも止まったりした、良い環境で最新の知識を学べる今の学生が羨ましい思いである。  
(酒井 正嘉)

昭和25年卒業

今冬は本当に寒かったが、一病息災、或いは二病を抱えながらも、それぞれ対処よろしく、頑張っている。デイケアに通っている人もいる。特に療養中の諸兄には折角ご自愛下され春爛漫の頃には快気されますよう祈ります。

(鈴木 昭治郎)

昭和32年卒業（千葉薬32会）

在学中に始められたクラス雑誌“CHAOS”も断続的に継続してきたが、







卒後50周年記念号ではほぼ全員の寄稿を得て刊行された。

この度、

来年早々の発刊を目指してVOL.8の企画が発表された。46名でスタートしたこの会も、残念ながら10名の逝去をみている。健在の全員がこの3月末で傘寿をクリアする次第だが、当分は元気に過ごしたいものである。

(小幡 誠)

昭和33年卒業

同級生は、3年次に医学部に転籍した2名を加えて46名(女子11名、男子35名)。残念ながら鬼籍に移った人が6名(女子1名、男子5名)。故あって消息不明の人が2名。残りは、男の平均寿命(80.2歳)を既に超えたか、近々手の届くところまでやって来ました。さすがに現役で働いている人は少なくなりましたが、クラス会で午前2時まで痛飲し、朝飯をしっかり食べるつわものもいて、「東京オリンピックまでは何としても」を旗印に頑張っています。

クラス会は毎春行われています。昨年は5年振りに外房鵜原の鵜原館に13名が集合し、楽しいひとときを過ごしました。5年前に特別料理としてサービスされた「金目鯛の煮付」がお目当てでしたが、異常な高騰で膳には乗らず、いささか残念でした。今年は、東京目白の椿山荘です。この会報が配布される頃、多数の同級生の元気な顔が見られることを切に願っています。尚、昨春には渡辺和夫名誉教授に栄えある瑞宝中綬章が授与され、クラス一同の誇りとなっています。

(武藤 明臣)

昭和34年卒業（亥鼻三四会）

三四会では毎年一泊で会を開いていましたが、14年10月に予定していた会が台風によって中止となり、15年2月19日昼食会形式で開催となりました。場所は横浜中華街萬珍楼點心舗で、旧暦の正月春節の日に合わせてました。参加者は首都圏を中心に16名で、點心料理を味わいながら、恒例の近況報告をまじえ歓談しました。終了後は、町へ出て採青（獅子舞）を見る予定でしたが大変な人出で、良く見られた人、あまり見られなかった人さまざま自由解散となりました。

今回も悲しい知らせがありました。昨年、小川通孝さん、三枝焯子さんが亡くなられ、会の初めにご冥福を祈って黙祷をささげました。(神田 昌一)



昭和35年卒業（珊瑚会）

昨年5月28日 武藤、鹿倉両幹事の企画で日本最初のロシア料理専門店「渋谷ロゴスキー」でクラス会を開催。男性11名、女性5名、計16名が参加、カチューシャを口ずさんでロシア料理を堪能。近況報告、学生時代の思い出、母校の最近の動向の報告等で歓談、次のクラス会で元気にお会い出来ることを楽しみにして解散した。老骨にムチ打ってと謙遜するが、いまだ若々しくお元気な女性の方々が今回も会を一層盛り上げた。

日本の平均寿命の歳を迎えつつありますが、まだまだ元気で旅行、山登り、ゴルフ、趣味、薬剤師の仕事など楽しんで参りたいと思います。「珊瑚会は心の支え」とのご意見、末永く大事にして参りましょう。

金井芳江様（那覇市）が昨年3月お亡くなりになった。ご主人の金井孝雄様からのご報告に珊瑚会一同大変驚いた。卒後40周年記念のクラス会（平成12年2月）は沖縄で開催、金井ご夫妻に歓待され、大変お世話になりました。厚く御礼を申し上げ、「祈 御冥福」をお送りして芳江様のご冥福を珊瑚会一同心からお祈りした。

(秦 初博)



昭和36年卒業（三六会）

我々のクラスは、昨年と今年で、大部分の者が喜寿を迎えた。少しずつ体力の衰えを感じるが、活動としては、時々クラスの会(ランチ会食中心)



と、ほぼ毎年行う2泊3日の旅行である。15年位前は40数人のクラスメート中、20人近くが参加したこともあるが、最近は最低4人のこともあった。

26年度は「お城めぐりの旅」と題して、10月21日から2泊3日の旅をした。京都に集合し、兵庫県日本海側の竹田城跡、同じく瀬戸内海に面した播州赤穂城、次いで姫路城を訪れた。企画が皆の気に入ったせいか、体調が良かったせいかこの数年では最高の8人参加した。お城を見るだけでなく、周辺の町の観光、移動中の列車内でのおしゃべり、温泉や食事の楽しみなど、旅行全体が楽しみである。いつまでできるだろうか。

(村上 泰興)











# 学部だより

## 教員の異動 (2014年5月1日～2015年4月1日)

|              |                                              |                |                       |
|--------------|----------------------------------------------|----------------|-----------------------|
| 26. 6. 30 辞職 | 山本 恵司 特任教授 (製剤工学)<br>(独)科学技術振興機構 プログラムオフィサーへ | 27. 1. 19 採用   | RAI AMIT 特任助教 (国際創薬学) |
| 26. 7. 1 採用  | 堂浦 智裕 特任助教 (薬品製造学)                           | 27. 1. 31 辞職   | 鈴木 優章 助 教 (薬品物理化学)    |
| 26. 7. 31 辞職 | 花岡 宏史 助 教 (分子画像薬品学)                          |                | 島根大学大学院理工学研究科 講師へ     |
| 26. 9. 15 辞職 | 群馬大学大学院医学系研究科 寄付講座教員へ                        | 27. 3. 1 採用    | 小椋 康光 特任教授 (薬品製造学)    |
|              | 富山大学和漢医薬学総合研究所 准教授へ                          | 27. 3. 31 定年退職 | 濱田 康正 教 授 (薬化学)       |
| 26. 10. 1 昇任 | 東 顕二郎 講 師 (製剤工学)                             | 27. 3. 31 定年退職 | 山本 友子 教 授 (微生物薬品化学)   |
| 26. 10. 1 採用 | 石川 直樹 助 教 (活性構造化学)                           | 27. 3. 31 辞職   | 山浦 克典 准 教 授 (高齢者薬剤学)  |
| 26. 11. 1 採用 | 藤吉 正哉 助 教 (病院薬学)                             |                | 慶應義塾大学薬学部 教授へ         |
| 26. 11. 1 昇任 | 小林江梨子 准 教 授 (臨床教育)                           | 27. 4. 1 採用    | 植田 圭祐 助 教 (製剤工学)      |
| 26. 12. 1 採用 | Mahmood Ashfaq 特任教授 (国際創薬学)                  | 27. 4. 1 採用    | 米田 友貴 助 教 (薬品物理化学)    |
| 27. 1. 1 採用  | 鈴木 博元 助 教 (分子画像薬品学)                          | 27. 4. 1 昇任    | 根本 哲宏 教 授 (薬化学)       |
|              |                                              | 27. 4. 1 昇任    | 関根 秀一 講 師 (生物薬剤学)     |

(H27.3.19現在)

## 2015年度薬学部入学者の状況

入学者87名 (男40名、女47名：推薦10名、前期63名、後期12名、帰国子女2名)

### 出身高校一覧

- 3名 千葉東 (千葉)
- 2名 土浦第一 (茨城)、浦和第一女子 (埼玉)、大宮 (埼玉)、市川 (千葉)、渋谷教育学園幕張 (千葉)、県立千葉 (千葉)、県立船橋 (千葉)、穎明館 (東京)、桜蔭 (東京)、筑波大学付属 (東京)、日比谷 (東京)、本郷 (東京)
- 1名 Jericho High School (アメリカ)、Harrison High School (アメリカ)、釧路湖陵 (北海道)、札幌北 (北海道)、函館ラ・サール (北海道)、北嶺 (北海道)、秋田 (秋田)、山形東 (山形)、盛岡第一 (岩手)、仙台第一 (宮城)、足利 (栃木)、宇都宮女子 (栃木)、江戸川学園取手 (茨城)、並木 (茨城)、浦和明の星女子 (埼玉)、栄東 (埼玉)、川越女子 (埼玉)、越谷北 (埼玉)、柏南 (千葉)、木更津 (千葉)、国府台女子学院高等部 (千葉)、昭和学院秀英 (千葉)、匠瑳 (千葉)、長生 (千葉)、東邦大学付属東邦 (千葉)、八千代松陰 (千葉)、青山 (東京)、お茶の水女子大学附属 (東京) 小山台 (東京)、駒場東邦 (東京)、頌栄女子学院 (東京)、戸山 (東京)、西 (東京)、白鷗 (東京)、三鷹 (東京)、武蔵 (東京)、明治学院 (東京)、立教女学院 (東京)、早稲田 (東京)、厚木 (神奈川)、希望ヶ丘 (神奈川)、相模大野 (神奈川)、逗子開成 (神奈川)、洗足学園 (神奈川)、柏陽 (神奈川)、横浜雙葉 (神奈川)、高田 (新潟)、新潟南 (新潟)、片山学園 (富山)、金沢大学附属 (石川)、伊那北 (長野)、上田 (長野)、旭丘 (愛知)、関 (岐阜)、奈良 (奈良)、明石北 (兵庫)、広島皆実 (広島)、昭和薬科大学附属 (沖縄)

## 2015年度大学院医学薬学府入学者の状況 (4月入学者)

修士 (薬学領域) 入学 46名：総合薬品科学専攻46名

博士 (薬学領域) 入学 23名：先端医学薬学専攻 (4年制) 9名、先端創薬科学専攻 (3年制) 14名

## 第100回薬剤師国家試験合格状況

平成27年2月28日～3月1日実施

新卒合格率 80.6% (合格者29名：80.6%は全国73大学中、24位の成績です。)

## 2014年度 卒業生・修了生の進路

学部4年制 46名

進学 42名：千葉大学39名、東京大学2名

学部6年制 36名

進学 1名：千葉大学 (社会人進学者)

病院 8名：恵寿総合病院、つくばセントラル病院、茨城県厚生連病院、豊見城中央病院、白澤病院、慶應大学附属病院、千葉大学医学部附属病院、鹿児島大学医学部附属病院、

企業 22名：ウエルシア薬局、日本新薬(株)、(株)スギ薬局、(社法)日本血液製剤機構、(株)医薬品医療機器総合機構 (3名)、第一三共ヘルスケア(株)、トーアエイヨー(株)、ゼリア新薬(株) (4名)、大正製薬(株)、バイエル薬品(株)、(株)ココカラファインフラスケア、日本メディカルシステム(株)、(株)健栄、第一三共(株)、グラクソスミスクライン(株)、中外製薬(株)、(株)ライオン (但し、ゼリア新薬の1名は社会人進学者)

公務員2名：神奈川県、船橋市立医療センター

未定 3名：

修士修了 43名

進学 11名：千葉大学11名

企業 29名：東洋紡(株)、(株)科研製薬、(有)ジャスメック、Meiji Seikaファルマ、ワールドインテック、キャセイ薬品工業(株)、日本化薬(株)、東陽インキSCホールディングス、KHネオケム(株)、東洋合成工業(株)、アルプス薬品工業(株)、アステラス製薬(株)、中外製薬(株)、マルホ(株)、協和発酵キリン(株)、日本ジェネリック(株)、日本マルコウ(株)、小川香料(株)、住友製薬(株)、久光製薬(株)、日立化成(株)、シミック(株)、田辺三菱製薬(株)、セントラル硝子(株) (2名)、(株)東陽テクニカ、富士フィルムRIファーマ(株)、(株)エバメル、(株)常盤植物化学研究所

公務員2名：東京都、神奈川県

その他1名：(千葉大学薬学部科目等履修生)

博士修了 20名

企業 16名：田辺三菱製薬(株) (2名)、帝京大学、塩野義製薬(株)、国際医療福祉大学、城西国際大学、(株)医薬品医療機器総合機構、第一三(株)、大正製薬(株)、エスエス製薬(株)、千葉大学薬学部、アステラ製薬(株)、昭和薬科大学、浜松医科大学、湧泳製薬(株)、日本学術振興会

公務員2名：千葉県 (2名)

## 今年度の受賞記録

(平成26年1月～平成27年3月):教員の受賞を掲載

|          |                                                                        |
|----------|------------------------------------------------------------------------|
| 平成26年2月  | 平成25年度千葉大学優秀発明賞 西田篤司、中村浩之、村山俊彦(薬品合成化学・薬効薬理学)                           |
| 平成26年3月  | Plant & Cell Physiology論文賞(日本植物生理学会) 山崎真巳、齊藤和季(遺伝子資源応用)                |
| 平成26年6月  | Highly Cited Researchers 2014(トムソン・ロイター社) 齊藤和季(遺伝子資源応用)                |
| 平成26年9月  | 学術貢献賞(日本生薬学会) 北島満里子(生体機能性分子)                                           |
| 平成26年9月  | 生薬学会賞(日本生薬学会) 齊藤和季(遺伝子資源応用)                                            |
| 平成26年9月  | シクロデキストリン学会奨励賞(シクロデキストリン学会) 東頭二郎(製剤工学)                                 |
| 平成26年11月 | 優秀賞(第32回メディシナルケミストリーシンポジウム) 北島満里子、田口美悠美、浅場絢ヌ<br>ネッツ、小暮紀行、高山廣光(生体機能性分子) |

## 叙勲のお祝い

### 【大橋 國雄先生】

平成26年春の叙勲で、大橋國雄千葉大学名誉教授が瑞宝中綬章を受章されました。大橋國雄先生は昭和37年に文理学部助手として着任された後、昭和59年に教養部教授に昇任されました。その後、平成6年より薬学部教授に配置換えされ、平成12年までの6年間にわたり放射性薬品化学研究室を主宰され、平成12年に名誉教授となりました。その間、放射化学及び放射線管理に関する該博な知識と豊富な経験をもって薬学研究の発展と人材育成にご尽力されました。また、千葉大学アイソトープ総合センター長を併任して施設の建設、管理・運営並びに同センターの発展に大きく貢献されました。

### 【渡辺 和夫先生】

平成26年春の叙勲で、渡辺和夫千葉大学名誉教授が瑞宝中綬章を受章されました。渡辺和夫先生は昭和58年に薬学部教授として赴任され、平成12年までの18年間にわたり薬品化学研究室を主宰され、平成12年に名誉教授となりました。その間、薬品作用学及び薬効評価学に関する豊富な知識と経験をもって薬学研究の発展と人材育成にご尽力され、数多くの卒業生、修了生を送り出しました。また、薬学部長、評議員、文部省学術審議会評議員、薬学視学委員、厚生省中央薬事審議会委員などを歴任され、薬学部、大学の発展のみならず、国の行政にも大きく貢献されました。

## 薬友会より

薬友会ホームページURLは随時更新しています。今までの薬友会報が閲覧できるとともに、住所変更などもメールで連絡できます。

<http://www.p.chiba-u.jp/yakuyukai/>

### 平成26年 活動実績

- 3月 新入生入会案内(新規終身会員98名)
- 5月 薬友会24号発行
- 7月 役員会・常任理事会及び第23回千葉大学薬友会生涯教育セミナー・宮木高明記念講演会開催(薬学部120周年記念講堂)「創薬・医療の最前線－基礎から患者へ－」(講師4名、参加者125名)
- 11月 役員会・常任理事会、総会

### 平成27年 活動予定

- 3月 新入生入会案内
- 5月 薬友会報25号発行
- 7月 役員会・常任理事会及び第23回千葉大学薬友会生涯教育セミナー
- 12月 役員会・常任理事会

### お知らせ

薬友会のさらなる活性化のために、終身会員加入とご寄付をお願い申し上げます。

- 1) 終身会員：会費2万円、昭和48年に開設(2014年、加入率約75%)会員名簿CDを更新のたびに無料で配布いたします。
- 2) ご寄付：一口2千円から随時受け付けています。特

に終身会員会費が1万円であった会員の皆様のご協力をお願い申し上げます。同封の振込用紙の通信欄に、「終身会員」あるいは「寄付」と明記の上、氏名、住所、卒業年度をご記入いただき<郵便振替口座00150-5-551796千葉大学薬友会>にお願い申し上げます。

- 3) 名簿冊子：会員名簿の冊子体についてご希望がございましたら 以下にご連絡ください。総部数を確認後、有料にての頒布を検討いたします。

E-メール：yakuyukai@chiba-u.jp

FAX：043-226-2873

### 平成27年度各種委員会名簿

(○印、現委員長。前委員長はアドバイザーとして参画)  
総務委員会 ○村山 俊彦、藤野 裕道、中村 浩之、村上 泰興(S36)、根矢 三郎(前委員：アドバイザー)

財務委員会 ○山本 友子、高屋 明子、佐藤 慶治、村上泰興(S36)、濱田 康正(前委員：アドバイザー)

名簿委員会 ○高山 廣光、北島 満里子、小暮 紀行、村上 泰興(S36)、戸井田 敏彦(前委員：アドバイザー)

事業委員会 ○高野 博之、○関根 祐子、稲川 知子、大久保 正人、佐竹 尚子、渡辺 楷(S33)、根本 哲宏(前委員：アドバイザー)

会報委員会 ○戸井田 敏彦、西村 和洋、東 恭平、渡辺 楷(S33)、加藤 文男(S47)、山本 恵司(前委員長：アドバイザー)



## 薬学部の芸術作品「孔雀の絵」

薬学部には大きな「孔雀の絵」が飾られています。正式な画題は「季の回想一夜明」です。西千葉の時代には薬学部講堂正面にありましたが、亥鼻移転とともに場所を移し、現在は1期棟エントランスにあって、日夜、学生・教職員を見つめています。作者は、多摩美術大学日本画専攻の中野嘉之教授です。この作品は微生物薬品化学研究室の初代教授（昭和37-55年）、山岸三郎先生のご家族から昭和55年10月に寄贈されたものです。

山岸三郎先生は昭和52-54年に薬学部長を務められ、薬学部の永年の懸案であった博士課程設置に向けてご尽力されました。昭和54年4月、博士課程設置が実現しましたが、先生はその直後に病に倒れられ、昭和55年8月16日に帰らぬ人となりました。薬学部では、先生のご功績を讃え、ご薫陶に感謝して、昭和55年9月13日に「千葉大学薬学部主催告別式」を執り行いました。この葬儀の後に、ご遺族から謝意とともに本作品が寄贈されました。なお、作者の中野嘉之氏は山岸三郎先生の女婿にあたられます。



(山本 友子)

## 西千葉の標本室にあった変形菌標本について

西千葉キャンパスから亥鼻に移転する際に、西千葉の標本室にあった標本の一部を国立科学博物館に移管しました。その中で変形菌（いわゆる粘菌）の標本について報告します。

変形菌標本は、ガラスつきの小箱128個に入って、すべてに採集年月日、採集地、採集者名が記載されて保存状態も良好でした。採集者として、落合英二、小畔四郎、菊池理一、中川九一らの名前があり、調べると神奈川県立生命の星・地球博物館の「落合英二変形菌類コレクション」と類似していることがわかりました。落合先生は、昭和の初期から我が国の近代薬学を築いた著名な薬学者ですが、1934（昭和9）年から一時千葉医科大学付属薬学専門学校講師を兼任されていました。落合先生は、本業の植物アルカロイド研究の他にも変形菌にも熱心だったようで、その様子は日本変形菌学会（<http://henkeikin.org>）の変形菌研究者列伝に詳しく述べられています。そして採集者のもう一人、菊池理一氏も千葉大に在籍していたことがわかりました。菊池氏は栃木県、岩手県で農林技師として努められた後、1960年から1968年まで嘱託研究員として千葉大学薬学部におられました。菊池氏は現役時代に精力的に変形菌を採集し、あの南方熊楠に自作の標本を提供し天皇の天覧に供したこともあるそうです。他に採集者として名前のある中川九一氏や伊藤春夫氏も菊池氏の弟子とのこと。菊池氏が千葉大に在籍した時期は落合先生の在籍時期からだいぶ後ですが、その頃は落合門下の萩庭丈寿先生が生薬学教室を主宰されていて、その縁で菊池氏が千葉に来られて変形菌標本を残したのだと思われます。

こうして標本について調べるうちに千葉をめぐる落合先生、菊池氏、萩庭先生の縁を辿ることになりました。そして落合先生が若い頃に東大で研究されていたマメ科クララ（苦参）のアルカロイド成分マトリンの研究は、その後、千葉大の萩庭先生、村越勇先生、星薬科大の大宮茂先生と引き継がれ、現在でも私が所属する遺伝子資源応用研究室（斉藤教授主宰）で続いています。研究者や研究技術が変わっても、千葉の地で綿綿と繋がってきたものがあることをあらためて深く感じました。

(山崎 真巳)



## 薬用植物園について

亥鼻キャンパス、サークル棟北側の薬用植物園を御存知でしょうか。薬木を中心に20種余りの薬用植物が栽培されています。一昨年、植物名、成分や用途などを記載したプレートを設置しました。機会があればご覧ください。一方、西千葉キャンパスでは「次世代モビリティ・パワーソース研究センター」の新設にともない、薬用植物園の東側圃場が閉鎖されました。百周年記念館周りの薬木園と圃場は継続して管理しています。

(山崎 真巳)



西千葉キャンパス



亥鼻キャンパス

## 第24回千葉大学大学院薬学研究院 薬友会生涯教育セミナー・宮木高明記念講演会開催のお知らせ

**日時**：平成27年7月11日（土） 13：00～16：00

**場所**：千葉大学薬学部120周年記念講堂  
（医薬系総合研究棟Ⅱ期棟 1階）  
（〒260-8675 千葉市中央区亥鼻1-8-1）

**主催**：千葉大学大学院薬学研究院・千葉大学薬友会

**共催**：日本薬剤師研修センター（参加者には日本薬剤師研修センターより単位が認定されます。）

**テーマ**：「在宅医療で期待される薬剤師の役割」

### 生涯教育セミナー

#### 1) 「地域包括ケア時代の6年制薬学教育」

光本 篤史 先生（城西国際大学 薬学部）

「少子高齢・減少社会の進展に伴い地域包括ケアが求められる中、今年度より6年制薬学教育は新カリキュラムへと移行しました。専門性を備えた医療を提供し、国民の健康を支える実践力を養う教育事例を紹介いたします。」

#### 2) 「20年間の在宅支援—地域密着型を目指して—」

福地 昌之 先生（フクチ薬局）

「薬局における調剤業務の変化も現在では第五世代に入り、そこには在宅調剤や他職種連携という言葉が掲げられるようになってきました。これからの薬局は、地域住民への支援となるような存在になっていかねばなりません。」

#### 3) 「心不全の在宅医療における服薬支援の重要性：薬剤師への期待」

眞茅 みゆき 先生（北里大学 看護学部）

「心不全の急性増悪の原因の1つに服薬アドヒアランスの低下がある。退院後の心不全患者の服薬アドヒアランスの維持には、病院、外来、在宅とシームレスな支援が求められ、この分野における薬剤師への期待は高い。」

### 宮木高明記念講演会

「“Aging in Place” 実現のための地域づくり～新たな「地域医療像」への羅針盤～」

飯島 勝矢 先生（東京大学 高齢社会総合研究機構）

「今後、我が国の医療政策が問い直されているなかで「病人である前に『生活者』である」という理念の下に、地域完結型の医療への進化、そして機能分化型のシステム型医療へのパラダイム転換が求められており、取り組んでいる「柏モデル」から再考してみる。」

終了後懇親会があります。 医薬系総合研究棟Ⅱ期棟 大会議室（記念講堂の階下）

**セミナー参加費** 1,500円（事前予約） 2,000円（当日）

**意見交換会（懇親会）参加費** 2,500円（事前予約） 3,000円（当日）

**参加申込み方法** 同封または郵便局備え付の払込書にて下記の郵便振替口座に参加費を送金ください。

払込書の通信欄に、氏名、住所、卒業年度を必ずご記入ください。

〔事前予約締切：平成27年7月1日（水）〕

**郵便振替口座：00150-5-551796 千葉大学薬友会**

本セミナーに関するお問い合わせは薬学研究院（分子心血管薬理薬学研究室）高野博之までお願いいたします。

（電話/FAX：043-226-2883）

**生涯教育セミナー・宮木高明記念講演会へのご招待**：本年度は薬学部卒業後35年の1980年（昭和55年）3月、卒業後45年の1970年（昭和45年）3月に卒業された方々をご招待いたします（参加費無料）。該当されます皆様は、当日受付係にお申し出ください。卒業生と一緒に参加される小・中・高校生および大学生については参加費無料いたします。

一般参加者のご来聴：卒業生のみならず一般の参加者も歓迎いたしますので、奮ってご来聴ください。

### 編集後記

昨年お手元に届けいたしました薬友会報24号は、たくさんの会員の皆様から「大変読み応えのある記事が多く、最後まで時間をかけて読み通しました。これまでよりもさらに薬友会が身近に感じることができました。」とのお声が届きました。山本恵司編集委員長の「初心に帰って、少し形を変えて編集してみました」（24号編集後記）との試みが、会員の皆様に通じたものと思います。25号の編集も二匹目を狙いたいと思い、作業を開始いたしました。膨大な量の原稿・写真の収集のための連絡、収集後の編集作業に追われてしまい、前編集委員会との力量の差を痛感した次第です。最終的には若い編集委員の先生方に助けられ、なんとか25号をお手元に届けることができ、胸を撫で下ろしております。内容につきまして何か誤植等がございましたら全て編集委員長の責任でございます。ご感想等をお寄せいただければ幸いです。（戸井田敏彦）

#### 薬友会報編集委員会

戸井田敏彦（委員長）、西村和洋、東恭平、渡辺楷（S33）、加藤文男（S47）、角田範子（S52）、山本恵司（前委員長）